なっていくような感じがしていましたが、今現在、慣れないなかでも夢中に作業していると心の錆が落ちて昔見ていた世界が見えてくるようにも思えます。（まぁ、気のせいかもしれませんが）こんな気持ちは忘れたくないものですね。昔とったのはエアー杵柄でしたが、これからは本物の杵柄がとれたらいいな～と思う今日この頃です。

「必要」とされる農業

南陽市在住　渡沢　寿
（平成9年生物生産学科卒）

農学部を卒業し就農してから早18年が過ぎました。その当時、それほど高い志を持って就農したわけではなかったという話はおいといて…。

うちの家族は私と嫁、父母、高2長男、中3長女、小6次男の7人。経営は水稲が約8ha、果樹は桜桃80a、西洋なし70a、桃10a、などです。特に水稲についてはJAS有機栽培をしています。有機栽培は30年ほど前から父親が取り組んでおり、私が就農した時にはすでにほぼ全面積で有機栽培をしていたので、私にとってのそれは特別なものではありませんでした。しかし当時から成功していたかと言うとそうではありません。失敗した年は収量が半分なんてこともありました。苗代を失敗して3回播き直したことも…。こんな大変な思いをして有機栽培を続ける意味はあるのか、がんばっても思ったように売れない高価な米は必要とされているのか、と悩んだこともありました。農家の先輩に指摘を受け、夜遅くまで議論したこともありました。

そんな中、参加した研修会で「田んぼの生きもの調査」に出合いました。私たちが米を作るだけだと思っている田んぼでは、様々な生きものたちが生活し、様々な草花が生い茂り、それらが複雑に絡み合い、生態系を形成し、特有の環境を作り上げている。そこに目を向け理解しない限り、自然と調和した米作りはできない。農家が自分よがりに肥料や農薬をまき、自分のタイミングで入排水し、草を刈る。これでは持続可能な農業はできない。という考え方を聞き、目の前がパーッと明るくなった思いがしました。

私は（農）山形おきたま産直センターという団体に農産物を出荷しており、そこでつながった仲間がたくさんいます。同じ考えの方向性を持った仲間は何よりの財産です。有機栽培の技術についても、仲間とだから様々な実験もできたし、多方面からの情報も得られました。元来、農業は一人でできるものではなく、地域や集団を作って営まれてきたと思っています。今もそれは変わりませんし、昔にも増して農業者同士のつながり、そして消費者との信頼関係を築いていくことが大事になってきていると考えています。

これからも仲間たちと、学習や実験、議論や検討を重ね、「食べる人」「地域」「環境」に必要とされる農業者を目指してがんばっていきたいと思います。

笹原先生を囲む会
（現・笹原先生の墓参り会）

千葉県農林総合研究センター
病害虫防除課
松下　みどり（旧姓畑谷）
（平成12年生物生産学科卒
平成14年農学研究科修了）

山大農学部で過ごした日々は大変思い出深く、振り返れば自分にとって貴重な5年間でした。あれからどれくらい経ったかを指折り数え、鶴岡を離れてから今年でもう13年目（！）になることがわかり、軽い衝撃を受けているところです。

当の在学中は勉学よりも他のことにばかり力を注いでいた不真面目な学生でしたが、そんな自分に対しても親のようにやさしく接して下さったのが、当時の育種学研究室の故笹原先生でした。その時、自分も含め研究室の同期が5人いましたが、偶然にも全員女。女子校のように騒がしい私たちにも関わらず「娘たち」と言って先生は皆に暖かく指導して下さいました。さらに、先生が私たち5人を当時の自宅官舎に招いて下さり、奥様も交えて皆でおでんの鍋を囲んだ記憶は今でも忘れることができません。

個性豊かな面々でしたが、馬が合ったのか卒業後も毎年集まることが多かった同期5人。平成

昨年の「笹原先生の墓参り会」、筆者左端

15年3月に先生が山大を退官され仙台のご実家に戻られてからは、今度は先生も含めて年に一回、一泊二日で「笹原先生を囲む会」を開催するようになりました。秋保、松島、蔵王…と皆で名所観光したり、芋煮をしたり、たわいもない会話をしたりと、先生と気のおけない時間を過ごすことができた貴重な会でした。

そんな会を重ねていった矢先、平成19年に先生が急逝されました。それまで私たちが大樹のように寄りどころにしていた先生がいなくなり、まるで心にぽっかり穴が空いたような気持ちでした。「笹原先生を囲む会」は消えてしまうかと思われましたが、同期皆の強い要望により、翌年からは「笹原先生の墓参り会」の名称の元、再び集まることとなりました。

この「笹原先生の墓参り会」も今年で7回目になります。先生の5人の娘たちもそれぞれ家庭を持ち、ちびっこも増え、今や集まるときは大所帯です。それを今でも快く受け入れて下さる先生の奥様には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

現在の私は、8年前に宮城から転職し、今は千葉県の農林総合研究センター病害虫防除課（旧病害虫防除所）で植物防疫や農薬取締業務に携わっています。病害虫の調査研究や農薬立入検査の日々で、作物育種の分野からはすっかり離れてしまいましたが、ほ場に入って様々な調査をする仕事に関しては学生時代とあまり変わりなく、性に合っていると感じます。

自分自身も関東に家庭を持ち、東北との接点がだんだん薄れてきてしまっている今日この頃ですが、年に一回仙台へ行き「笹原先生の墓参り会」で同期と墓前で先生にお会いするのを楽しみに、公私ともに日々頑張っていきたいと思っています。

山形大学での思い出

横浜市在住　森　洋佑

（平成14年生物環境学科卒）

急に（ついに？）私のところに回ってきた執筆依頼。さて何を書こうかと思っている。例えば「大学時代に一番がんばったこと」というような手記を書いてしまえば、次の執筆時には「大学時代に2番目にがんばったこと」としなければならなく、以下3番目、4番目…と。これではどんどんインパクトが下がってしまう。そこで、ここでは無難に「思い出」にとどめておいた（無難すぎる？）。しかし思い出といってもたくさんある。旅をした思い出、研究をした思い出、友と語り合った思い出。そのどれもが語り出したら一晩になってしまうほどの量がある。ここではその中の一つ、旅をした思い出を書こうと思う。

学生時代、訳も分からず遠くに行きたくてよく旅をした。もちろん時間はあるけれどお金はない時代、旅は自然と自転車になる。知らない道を走るのが楽しくて、ふらりと自転車を取り出して数泊の旅に出るということをよくやっていた。1日に280㎞を進み、次の日には立てなくなったことも。泊まる場所がなくて無人駅の待合室で寝たり、バス停の屋根の下で寝たこともあった。そうした無茶ができたのは学生だったからだろう。

旅の途中でいろいろな人たちにも出会った。道を聞いた露地販売のおばちゃんから持ちきれないくらいの夏みかんをいただいたり、休んでいるときに栄養ドリンクを差し入れてくれたおじさんもいた。チャリダー（自転車乗りのことを仲間内ではチャリダーと呼ぶ）同士で情報交換したり、言葉を交わさないまでもすれ違うときに目を合わせるだけで「仲間」だと思えるのが嬉しかった。ただ、クラクションで応援してくれる車には何度も驚いたけれど。

そして現在。学生時代を懐かしんでいるだけではない。実は今でも自転車の旅は続けている。さすがに道ばたで寝ることはなくなったけれど。学生時代から続く道。まだまだ知らない道はありそうだ。この旅、どこまで続くのだろう。

標高2, 360mにある、車道峠では日本最高所の大弛峠を登った。
この日は標高10mから出発し、全部で183kmを走破。

卒業してのち、現状

日本包装（株）　金本　朋洋

（平成17年生物生産学科卒）

柿の出荷資材、このような形でスーパーに置かせていただくのはいかがでしょうか。高級感もでますし、消費者の方々も手に取って食べてみようと思うかと思います。また、出荷に至り、このような包装機を導入することで作業が効率化します。お値段は…。

近畿圏内にて新鮮を食卓にとフレーズをうたいながら、JA様はじめ農家様、工場様他をお

得意様とし生産出荷および出荷、販売までの資材をご提案させていただく会社に勤め丸5年が経とうとしています。

入社し、まず与えられた勉強は様々な包装フィルムの名称、特徴、製造工程等でした。フィルム内に農産物を入れ、曇らないようにするしくみ、野菜の呼吸に合わせて孔を空けたフィルム、酸化防止の為にはどうするか等、出荷から販売に至るまで様々な工夫がされているのだと知りました。枝豆、豆苗、ブロッコリー等野菜一つ一つによって出荷先も異なれば野菜一つとて同じものもなく、出荷先に応じてどんなものが欲しいや、こうして欲しいと要望も異なります。それに対し、私共は出荷後出荷先までかかる日数や、スーパーに並びどのくらい持たせたいか、その際出荷元の顔となるパッケージ、ターゲット層等様々お客様とお話し、ご提案しています。そればかりではなく、例えばJA様の出荷ライン、野菜工場の生産出荷ラインの機械販売も手掛けております。

機械類におきましては、販売させていただきますのでメンテナンスも私自身多少なりともわきまえております。シーズンになると毎日作業服を着て、機械の修理をしております。機械の修理自体、私はこの会社に入り初めての事だらけでしたが、抵抗感もなく、逆に楽しく学び、お客様に対し対応する事ができていると思っております。

そして私は今、奈良県、京都府、愛知県を担当させていただいております。主に奈良ですが現在柿の出荷のピークを年末まで控えており毎日出荷ラインに立ち円滑に出荷できるようメンテナンスおよび資材の段取等しています。

皆様が生活の中で普段何も気にしてなければスーパーで何気なく購入している肉や加工品、野菜を包んでいる包装資材、いろいろな理由があって今の形になっているのはあまり知られてないのではないでしょうか。私はこの会社に入社してなければ気にもしなかった事だと思っています。そしてなによりもこの5年スーパーで並ぶ野菜の入った袋、お客様と相談して作ったデザインが販売されているのを見ると大変やる気が湧いてきてとても充実した気持ちになります。

これから先、まだまだ未熟な私ではありますが、お客様のニーズに答えるべくいろんなものに?を置き、考え、ご提案ができればと思っています。日々の成長を第一に。

大学時代の経験を生かして今できる事

(独)国際協力機構青年海外協力隊
コロンビア在住 **菅原 暢文**
(平成25年生物生産学科卒)

コロンビアの地に降り立ったのは、去年の10月の事です。首都のボゴタにある空港には、警察官が至る所に配置され、コロンビアのイメージを象徴するかのようでした。コロンビアのイメージと言えば、麻薬やゲリラ、治安が悪いとよく言われます。そんな国に、私は青年海外協力隊として赴任しました。

赴任先は、ボゴタから北に120キロに位置するスサ市という人口6,000人の小さな町です。この、周りは山々に囲まれ、非常にのどかな町に私は、地域開発や農業指導を目的とした活動を住民の人達と行うために来ました。

赴任当初は、インターネットもなく、スペイン語もうまく話せず、この町で知り合いもいなければ、日本人もいない。そんな場所で、早くもホームシックにかかってしまいました。もういっそこのまま日本に帰ってしまおうか。そう思った時、私の支えの1つになったのは、やはり大学時代の経験でした。

私は、大学3年生から卒業まで、当学部の学生ボランティア・プロジェクト「走れ!!わあのチャリ」に参加させていただきました。そこで仲間達や、先生、そして被災地で懸命に前に進もうとしている人々に出会い、貴重な経験をさせていただきました。その経験が頭を過り、もう少しだけ頑張ってみようという気持ちになり、現在もこうして、スサ市で住民の皆さんと一緒に活動することができています。また、ボランティア活動時に

ふるさとの庄内米　販売します
特別栽培米「つや姫」：日本で一番おいしいお米
「はえぬき」山形県独自品種、とてもおいしい
＊いずれも、育種には卒業生が関与しています
＊地域ブランド「刈屋梨」幸水は９月上旬販売
阿部重彰（昭和48年農学科卒）酒田市城輪
ＴＥＬ・ＦＡＸ0234-28-3000

母校の発展を祈ります!
宮城県古川農業試験場勤務卒業生一同
中井誠一(S53 農芸化学科卒)　日塔明広(S58 園芸学科卒)
斎藤益郎(S58 農芸化学科卒)　宮野法近(H6 農学科卒)
阿部倫則(H10 生物生産学科卒)　鈴木智貴(H17 生物生産学科卒)
相花絵里(H24 生物生産学科卒)　内海翔太(H24 生物生産学科卒)
阿部脩平(H25 生物生産学科卒)

は、自分がしたいことを考えるのではなく、住民の人達が何をしたいのかを考えるという大切さを学びました。それが、スサ市で活動する中でその大切さを実感しています。

現在、私は主に手工芸品を作る約20名の人達と一緒に、近くの市町村のお祭りでその商品を販売したり、小さな古民家を再生してお店を作ったりしています。この活動は、当初は予定などにありませんでしたが、住民の人達の声を聞き、一緒にやってみようというところから始まりました。こうして今、活動できているのは、自分の考えだけではなく、住民の人達に寄り添う大切さを学んだ、大学時代の経験があったからこそだと思っています。

赴任してから早くも1年が過ぎようとしています。コロンビア料理は、油っこいものが多く、お腹周りが気になり始めています。そのため、南米伝統の踊り、サルサをスサ市の人達と一緒に習い始めました。そのような交流なども大切にしながら、このスサ市のために、残り1年の任期を全うできるよう頑張りたいと思います。

〒052-0022　北海道伊達市梅本町4番地65
株式会社　富士ビルサービス
代表取締役社長　伊達　紀夫
業務内容　ビルメンテナンス業・警備業(施設・交通)・ボイラー保守運転管理
TEL　0142-82-3560　　FAX　0142-82-3561
E-mail fuji-building@future.ocn.ne.jp
経歴　北海道糖業㈱　職歴40年　㈱富士ビルサービス　現職在任20年

〒052-0012　北海道伊達市松ヶ枝町154番地20
社会福祉法人　泰生会
ケアハウス　伊達ぷらいむ館（収容人員　50名）
グループホーム（認知症対応型共同生活介護）こもれび（収容人員　18名）
理事副代表　伊達　紀夫
TEL　0142-21-5522　　FAX　0142-22-3310

（昭和32年農学科卒業）